
TAI ~厨二とあほ毛といじめられっこ~

clown

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TAI 〜厨二とあほ毛といじめられっこ〜

【Nコード】

N5838Y

【作者名】

clown

【あらすじ】

ある朝、いじめられっこの修司シュウジは、大好きな人である叶カナエ（あほ毛がついてる）にバンドに誘われる。そして、半強制的に入れさせられる。

音楽のことなんてほとんど分からない筆者が、バンドってかっこいいよなと思いき始めた小説。
青春小説になればいいと思うよ。

更新は不定期で、平日は、、、眠かったら、更新しません
目覚めてたら、連続更新するかもしれません

はじまり(厨二はまだ出てきません)

いつものように朝が来た。

いつものように家を出て、いつものようにイヤホンを耳にして大音量で音楽を流し、

そして、いつものように学校に行く。

いつものように下足ロッカーを開けると、いつものように上履きがない。

仕方なく、貸し出し用のスリッパを借りて、いつものように教室に向かい、自分の席に着く。

いつものように僕の机には落書きが大量にされている。

ほとんどが僕の悪口だ。

それを見ているといやになるから、仕方なく全部消す。

消し終わったら、先生が来るまで机に伏せて寝たふりをする。

これが僕の日常だ。

いつも、いつも、いつも、、、

僕がいじめられるようになったのは、1年生の冬頃からで、今年で2年目になる。

来年からは高校生になるわけで、この冬が終われば、この日常も終わる。

僕の通っている中学校の近くには5つの高校があり、僕の学校の生徒は大体そこに行く。

僕の成績は、中の上くらいだから、その5つの中でも評判がいい私立校にいける。

そうすれば、もういじめられることもないはずだ。

僕はもともと、友達が多いほうだった。

だけど、冬のある日それは変わった。

僕は、クラスの中心のようなやつにとび蹴りを食らわしてしまった。理由は、そいつが、僕の大好きな人の悪口を散々なまでに言ったからだ。

僕の大好きな人というのは、小学校からの同級生である女の子だ。その女の子は、真面目過ぎるといつてもいいほど真面目で、校則を破るやつとか、友達をいじめるやつとかを注意してまわるような子だった。

彼女の祖父は、空手の道場の師範代だ。一回、僕も、その道場に行ったことがある。

そのせいで、彼女は、幼いころから空手を教えられた。

だから彼女は、はむかってきたいじめっ子とかをヒョイと投げ飛ばしたりもした。

そんな彼女は、僕が小学3年生だったとき、一個上の子からいじめられそうになったときに必死にかばってくれた。

だから、僕は彼女が大好きだった。

そんな大好きな人のことを、そいつは、豚だとか、ビッチだとかそんな風にいって、大笑いした。

だから、何も考えられなくなって思いつきり蹴飛ばした。

そして、ハッと自分がしてしまったことに気づき、謝った。

だけど、そいつが許してくれるわけもなく、

「テメエー！何しやがる！」

と言って、襲い掛かってきた。

周りにいた彼の友達も一緒になって襲い掛かってきたから、いくらがんばっても、反抗できるわけなかった。

そして、次の日から、僕へのいじめは始まった。

もちろん、僕の大好きな人は、必死で守ってくれようとした。

最初のほうは、そいつら全員を投げ飛ばしてくれたりもした。

だけど、そいつらは、僕の大好きな人には見えないところでいじめてくるようになった。

僕は僕の大好きな人に、迷惑をかけたくなかったから、いじめられ

てるのを必死で隠し続けた。
そうやって、現在に至った。

そんなことを回想しつつ、寝たふりを続けていたとき、前のほうで
声がした。

「ねえ、修司^{シュウジ}ってば！」

音楽をとめ、イヤホンをはずし前を見ると、そこには叶^{カナエ}がいた。
叶というのは、僕の大好きな人の名前だ。

そう、この子が僕の大好きな人。

叶は、茶髪のストレートで、背は高いほうだ。

うちの学校は、制服なのできつちりと校則どおりに制服を着ている。
顔は、、想像に任せる。が、かわいい感じだと個人的に思う。
特徴は、頭のとっぺんにあほ毛が生えていることだ。

「ちゃんと聞いてた？」

叶が聞いてくる。

「ごめん、聞いてなかった。」

正直に答える。

叶が頬をふくらませる。

「もお〜！もう一回言うから、ちゃんと聞いててよね！」

「うん。」

「あのね、私、バンドやりたいな〜って思うの！」

「ふ〜ん。それで？」

「それでね、一人じゃバンドできないでしょ。」

「そうだね。」

「それでね、修司がバンドに入ってくれないかな？って！」

一瞬、考えた。

そして、「え〜」つと言いきりそうになったが、ここで「え〜」つと言
うと、手首をひねられて、いてててて！ってなつてから、強制的
にやらされるのがめにみえた。それがいつものパターンだったから。
叶はいつもそうだ。だから、あえて「いいよ」ということを決断し

た。ここまで、コンマ1秒。

「いいよ。」

僕は軽く笑っていった。ここでも軽く笑って言わないと「嫌なの？」といわれ、耳たぶをつねられ、いてててて！ってなって、「喜んでやらせていただきます」というはめになるからだ。それがいつものパターンだ。

「やった〜！」

と、叶は満面の意味で言う。そして軽く飛び跳ねる。

「じゃあ、練習は今日の放課後からだから！」

「えっ！他のメンバーいないから一人じゃバンドできないって言ったんじゃないの!？」

「誰がそんなこと言ったの？私は、一人じゃバンドできないって言っただけで、他のメンバーがいないだなんて一言も言ってないよ。」

「まあ、いいけどさ」

「じゃ、よろしく！」

そういって、叶は席に戻っていった。

それと同時に、先生が教室に入ってきた。

こうして、その日の朝は終わった。

曲は？

その日もいつものように授業が終わった。

そして、放課後。

練習をする^{カナエ}と叶に言われていたので、音楽室に行ってみた

そこには、アンプにつないだ「ギブソン」の「レスポール・モデル」のギターをもった叶と、ドラムスティックを持ち、「ヤマハ」のドラムセットの前に座る、眼鏡をかけた、えーっと、誰？

「おー、きたきた！修司^{シュウジ}！」

叶はこっちを見るなり大きな声でそういつて、思い切り手を振った。そんなに音楽室は広くないのだからそんなに大きな声で言わなくてもいいのに。

僕はそんなことを心の中で思いつつ、叶に質問した。

「その子は？」

目でその眼鏡の子を見た。

きつちりと整えた髪形で、征服もきつちりと着こなしており、どこか知的な雰囲気をもし出す黒髪の女の子だった。

「えーっと、この子はね、」

叶が紹介しようとしたとたんに、その眼鏡をかけた女の子が突然しゃべりだした。

「ボクのがだれかわからないのかね！ボクは君たち人類を創造した偉大なる主だぞ！」

一瞬にして空気が凍った。

まるで、一瞬で音楽室が北極に変わったようだった。

「は？」

思わず、素の反応が出てしまった。

「ああ、そうか。ボクは今、人間の姿をしていたんだった。君たちが分からないのも無理はないか。」

そうかそうか。いや、私としたことが。アハハハハハ
いや、勝手に自己完結されても困るんですけど、、、
心の中でそうつぶやいた。

「で、あなたの名前はなんですか？」

僕は、若干あきれ気味に言った。

「ボクは、君たちの隣のクラスの舞^{マイ}だ。よろしく。」

今度は普通に受け答えてきた。

変わったやつだな〜と思いつつ、舞という名前について考えた。
どこかで聞いたことのある名前だ。

そして、思い出した。

隣のクラスで、厨二病の激しいやつってことで有名になっている人
だ。

うわさは聞いたことがあったが、まさかここまでとは、、、
そう思いつつ、自分の名前を名乗ることにした。

自分だけ名乗らないのは失礼だ。

「僕は、、、」

と、名乗ろうとしたとき、舞がバツッと手を僕の前に広げた。

「それ以上言わなくていい。君の名前は修司^{シュウジ}くんたる！ハツハツハ
ツ。知っているぞ君の名前くらい。」

あっ、そう！

軽く怒りそうになった。

けど心の中だけで抑えた。

「そうですか。」

適当に受け答えてみた。

「さて、自己紹介も終わったことだし、さっそく練習始めましょう
！」

叶が相変わらずのテンションで、練習の話を持ち出した。

「誰がどの楽器をやるの？」

大体分かっただけだが、聞いてみた。

「私がギターで、舞さんがドラム。」

「うむ、この、打楽器がいつぱいついてるのはなんだか楽しそう
だ。」

舞さんが言う。

「そして、ベースとボーカルは修司！」

叶が僕を指差す。

「叶はボーカルやらないの？」

勝手な思い込みだが、普通、ギターがボーカルをやるもんじゃない
のかと思った。

「いいの、いいの。だってギター難しいし。ひくだけで精一杯だよ
。」

叶は、ポロロンとギターを鳴らした。

「舞さんは、本当にドラムでいいの？」

一応聞いてみた。

「もちろんだ！」

やたらと張り切ってるみたいだった。

「まあ、ならいいけど、。」

「文句あんの？」

叶がにらんでくる。

「ないです。」

「それでよし！」

強制的過ぎる、。

「それじゃあ、ハイこれ、ベース！」

叶は「フェンダー」の5弦ベースをグイッとこっちに近づけた。

「えっ、お金は？」

「5万5千円なり。」

「えっ、とるの」

叶はグッと親指を立てた。

「ああ、そうですね、。、つけで。」

叶はちょっといやそうな顔をして、

「しょうがないな。じゃあ、明日までだぞ！」
と云った。

はあ、今月分のお小遣いが、、、
そんなことを、思っていたら、また叶ににらまれそうなのでやめた。

「とりあえず、メンバーと楽器はいいとして、曲はなにやるの？」
僕は叶に向かって聞いた。

「ボクは、アニソンがいいと思うぞ。ボーカロイドとかもいいんじゃないか？」

舞に聞くと絶対こういう答えが返ってくると思ったので、叶に向かって聞いたのだが、勝手に返事が帰ってきた。

「いや、曲は決まってるんだ！」

叶は、自信満々に云った。

そして、叶はバックから、CDを取り出し、近くにあったCDラジカセに入れた。

それは、「ザ・ブルー・ハーツ」の「ロクデナシ」だった。

これは、僕の大好きな曲だった。

「ふ〜ん。こういう曲か。なんだか難しそうだな。」
舞が目を閉じて曲を聴きながら云った。

たしかに、どう考えても、初心者のギタリストとドラマーと少しだけ、楽器について知ってるくらいのベーシストじゃ難しいと思ったけど、これから、がんばればいい、そうとも思った。

こうして、練習は始まった。

練習しようと思ったけど、まずは形からだよね

「それじゃあ、練習を始めよー！」

叶が元氣よくこぶしをあげながら言った。

「その前に、楽譜は？」

練習をするにしても、楽譜がなければ練習の仕様がな

「安心したまえ修司くん！わたしはちゃ〜んと持ってきているのだよ」

ドヤ顔を決めながら、叶は自分かばんの中から、大きな音符がプリントされたファイルを取り出した。

そしてそのファイルの中から、何枚かの楽譜を取り出した。

「ジャーン！これが、やる曲の楽譜です！」

叶はドヤ顔をしながら僕と、舞さんに見せ付けてきた。

そして、その楽譜を、僕と舞さんに配布した。

楽譜を叶が配布し終わると同時に舞さんが何かを思い出したような顔をして、

「このバンド、名前はなににするんだ？」と聞いた。

確かに、バンド名なんて一切考えてなかった。

すると、その質問をうけた叶は待ってましたといわんばかりに、答えだした。

「私は、いくつか案をかんがえてきたのです！」

また、ドヤ顔をした。

確かに、ドヤツといえることかもしれないが、いちいちドヤ顔をしないでいいのにと心の中で思ったりした。

「私の考えてきた案はこれです！」

そういって、叶はバンド名の案がたくさん書かれた紙を机の上に置

いた。

上から順に見ていく、、、

危ない名前が多い

たとえば、Beatleゴホンゴホンとか

世界的なバンドの名前を初心者バンドがtheだけ抜いて使うのは失礼だと思うし、ファンも怒るだろう。

他にも、ドラ○もんズとか、ミッ○ーマ○スズとか

なんか、バンドのイメージを描いてみたら著作権に引っかかりそうなものばかりだった。

この案に対して言いたいことはたくさん思い浮かんできたが、僕より先に舞さんが口を出した。

「おい、これはいろいろと問題がある案ばかりじゃないか？」

叶は驚いたような顔をした。

「えっ、どこに問題があるの？」

「ボクが思うに、これではバンドのイメージキャラクターとか作ったときに著作権に引っかかりたり、世界中のファンの人たちから怒られちゃったりすると思うんだ。」

僕は。厨2病のくせにまともなことというな〜と少し感心してしまっ

た。

しかし、その感心はすぐに裏切られた。

「じゃあ、どんなバンド名ならいいの？」

と、叶が聞く。

「う〜ん。そうだな〜。」

舞さんは目を閉じた。そして、数秒後きっかりと目を開けた。

「アフタースクールお茶時間とかどうだ？」

「がっかりだ。」

まさか、今年の冬映画化するあのアニメのパクリとは、、、

「がっかりだ。」

「やうよ！」

そういつて、もう、二人に案を出させるのはやめた。

そして、あるバンド名を思いついた。

「そうだ！このバンド名の名前はT A Iにしよう。」

僕の思いついたバンド名は、T y u n n i t o A h o g e t
o I j i m e r a r e k k o (厨二とあほ毛といじめられっこ)
略して、T A I という名前だった。

「意味は？」

舞さんが聞いてくる。

答えにくい質問だった。

だって、意味がメンバーの短所(あほ毛除く)の頭文字だなんていえない。

「え〜っと」

悩む。

そこに叶がしつてか、しらずか、助け舟を出してくれた。

「あんまり深い意味はないんでしょ？」

「そっ、そうなんだよ！」

「ふうう〜ん。まあ、なんかかつこいいから、いいか。」

舞さんは、よく分からないが納得してくれたようだ。

ふうと心の中で一息。

叶は、

「もちろん私はこの名前でいいよ〜！横文字が入ってるしね！」
と納得してくれた。

横文字が入ってればなんでもいいのかよ！って突っ込みそうになったがあえて心の中にとどめた。

こうして、バンド名はT A Iになった。

帰り道

バンド名が決まり、とうとう練習が始まるかと思ったら、叶が時計を見て急に「あっ！」と声をあげた。時計は6時半を指していた。「ごめん！今日は塾があつたから練習は次回からってことで。今日の活動はおしまいで！」

叶は、それだけ言って、さっさとギターをしまい、走って出ていってしまった。

音楽室には、僕と舞さんだけが残っていた。沈黙、、、よく考えてみれば、舞さんとは、違うクラスということもあって一度も話したことがない。

それに舞さんは、たとえ厨二でも一応は女の子だ。気まずい。とりあえず、アニメの話とかすればいいのか？しかし、アニメのことなんて全然分からないし、大体、女の子である舞さんが、男の僕が見るようなアニメを見るのか？
分かん、、、

そんなことを考えていると、舞さんの方から話しかけてきた。

「修司君だったよね？叶、帰っちゃったけど、、、どうする？」

「どうするって？」

「いや、、、ほら、、、ボクたちも帰るかい？」

そんな感じで、舞さんと一緒に帰ることになった。

真つ暗な帰り道に街頭の光が差す。沈黙、、、。気まずい、、、。何か話題を作らなければと、とりあえず話しかけてみる。

「あっ、あのさ〜舞さん」

「なんだい？」

「え〜っと、舞さんはどこに住んでんの？」

ぎこちない笑みを浮かべつつ聞いてみる。

っていうか、学校からだいぶ遠い僕の家近づいてきてるけど、大丈夫なのかな？

舞さんは、考えてたことに対して答えた。もしかして心読まれた？

「心配しなくてもこっちの方向で大丈夫だ。」

「ああ、そう、、、」

「、、、」

また、沈黙、、、

そして、今度は違うことを聞いてみる。

「そつ、そういえばさ、なんで、舞さんはバンドに入ったの？」

舞さんは「うーん」といいながら、視線を斜め上に向けた。

そして、少しして答えた。それは僕とまったく同じ理由だった。

「叶が誘ってきてくれたから、、、かな、、、」

過去

「叶カナエが誘ユつてきてくれたから、、、かな、、、」

舞マイさんは少しうつむいた。眼鏡をかけていたから分らなかつたけど、なんだかとても悲しい表情をしているようにみえた。

「何かあったの？」って聞きたかった。けど、なんだか聞いてはいけないような気がして。

「なにか聞きたそうだね、修シュウジ司くん。」

また内心を読まれたようだ。舞さんが、軽く笑いながらこつちを見てくる。明るく振舞おうとしてるんだろっけど、目は笑ってなくて、やはり、悲しい感じは伝わってきた。

「過去に何かあったのかって聞きたいんだろっ？」

「いつ、いやそんなことは、、、」

「別に、うそなんかつかなくていいよ。」

「うそなんかじゃないよ。」

「顔に、『知りたいです。』って書いてあるぞ。」

「えっ！」

思わず、顔をこすってしまった。

「ハハハ、君は面白いな。素直で。君はとても分かりやすい。」

しばらく、舞さんが笑う。恥ずかしくて軽く、頬が熱い。

「今度は、うそつかないで、正直に答えてくれよ。」
舞さんが仕切りなおす。

「ボクの過去に何かあったのか、聞きたいんだろ？」

「う、うん。」

仕方なく正直に答える。

「実はね、」

それは、僕がいじめられっ子じゃなかったら、受け止められないくらい悲しい話だった。

もともと、舞さんは、3人姉妹の次女だった。

舞さんの父親は、ずいぶん昔に、アルコール中毒になって、お金がなくなった家を出てどこか遠くで暮らしていて、母親がパートをして家計を保っていた。

3人姉妹だったから、母親は死ぬ気で、朝から晩まで仕事をして、必死で家計を切り盛りしていた。

そんなだったから、母親は過労倒れて病院に運ばれた。それが舞さんが小学校3年生のときだったそうだ。

とても、心配したけど、命に別状はなかったらしく、数日で、退院した。

それから、長女がアルバイトをするようになり、母方の祖母からもたすけてもらえるようになって、母の負担は減った。

そして、舞さんが小学5年生のときまでは、その状態が続いたそうだ。

そのときは、すごく幸せだったといっていた。

しかし、小学6年生のとき、事件はおこった。父が帰ってきたのだ。

父は、毎日のように、暴力を振るい、金を奪い、そして、でていって、日が暮れるまで酒を飲み、賭博にうちこんでいたんだそうだ。そうやってからは、地獄だったとか。

父は、金を出さなかった母にかっとなっているんなものを投げつけ、そのせいで母が仕事をできない身体になったり、三女がノイロ一ゼになったり、そのせいで、舞さんがいじめにあったり、とにかく大変だったんだそうだ。

そんなとき、叶が舞さんの家庭が父親のせいでめっちゃくちゃにな

っていることに気づき、学校の先生に相談したんだとか。

舞さんは、そのことを話す途中で、軽く泣き出しそうになっていた。

つらそうだった。

やはり聞いたのは間違っていたんだろうか。

そんな、後悔が後引く。

僕はただ、「大変だったね」としかいえなかった。

街頭の明かりが、照らす、、、。

その後、しばらく歩いたところで、舞さんは、赤い屋根の、「スミレ壮」と書いてある建物に入っていた。多分そこが家なんだろう。ってあれ？ここ僕の家隣だ。

そういえば、おかしいと思った。話の内容によると、叶は、学校のころから、舞さんのことを知っていたことになる。だって、叶は僕と同じ小学校だったんだから、もし叶が小学校のころから舞さんのことを知っていたのなら、僕と舞さんは同じ小学校に通っていたはずだろう。舞さんだけ、違う小学校にいて、たまたま、叶と知り合いだったなんておかしいだろ。

えっ、もしかして、舞さんも同じ小学校出身だったの!?

しかも、お隣さん!?

それなのに、まったく面識がないだ!?

僕は帰って、卒業アルバムを速攻で見返した。確かにキレイに舞
さんが写っていた。まさか小学校のころからの幼馴染だったとは、

驚きのあまり、その日は卒業アルバムを見たらそのまま寝てしま
った。

次の日

次の日の朝、目が覚めると、珍しく母が僕のことを呼んでいる。

「修司シユウジ！お友達があんたのこと待ってるよ！はやくしたくしなさいよ！」

友達？誰だろう？と思いつつ、顔を洗って、目を覚まし、朝食のトーストをくわえながら着替えて外に出た。すると、そこには僕の母と舞マイさんがいた。

「えっ？舞さん？どうしたの？」

「なに言ってるの？この子あんたを迎えに来てくれたのよ！まったく、朝から迎えに来てくれたやさしい友達に対して、失礼な子だね。」

母が、軽く怒った感じで言う。舞さんは軽く微笑しながら、「とんでもないです。」と言う。

「大体ね、あんたはね、、、」

母の説教が始まりそうだったので、「いつてきまーす！」と大声で言うて、逃げるように家を離れる。

舞さんも後からついてくる。

「舞さん、今日はどうして迎えに来てくれたの？」

とりあえず聞いてみる。

「いや、君が、隣の家に住んでいたからだよ。何か問題でも？」

何か、文章的に、僕が隣の家に住んでいたことは知らなかったらしい。昨日、僕が家に入っていくところを見たのかな？

「いや、べつに問題はないけど。」

とりあえず、返事をする。

そんな感じでその朝は、舞さんと登校した。特に話したことはなかったけど。

学校に着くと、やはり上履きがなくなっていた。とりあえず、ス

リップで教室に向かう。僕の机にはやはり、落書きがされている。その内容を軽く見ていると、バンドの悪口が書いてあった。それはちよつといやだったからいつも以上に力を込めて消す。

そして、昨日と同じように寝たふりをしていると、叶が話しかけてきた。内容は、今日も放課後、練習をするということだった。

授業が終わり放課後、音楽室に行くと、昨日と同じように、舞さんが、ドラムスティックを持ち、ドラムの前にすわり、叶がギターを持っていた。

「おお！来た来た！」

叶が手を振ってくる。そして、叶に近づくと、叶が手のひらを向けてきた。

「ベース代。」

僕はお金を渡す。

「はいどうぞ。」

「毎度！」

叶はお金を自分の財布の中にした。

そして、叶はゴホンとわざとらしい咳払いをして、こぶしを高く上げる。

「よし！じゃあ今日こそ練習するぞー！」

「おー」

とりあえず僕はのっておく。

「じゃあ、舞！カウントお願い！」

舞さんはコクリとうなずいた。

そして、

「1、2、1、2、3、4」

演奏が始まる。

しかしそれは、ただの騒音でしかなかった。

叶のギターは遅すぎて、ペースに合せられない。

舞さんのドラムは、走りすぎている。

そして、僕は、まともな音が鳴ってない。

ひどすぎる演奏だった。

「ストップ！ストップ！」

止めに入る。

僕が演奏をとめたので、二人とも不機嫌そうな顔をする。

「どうして止めた！？ボクの気分がせつかくのってきたというのに。」

「

「そうよ！私もこれから、本気を見せようと思ったのに。」

なんで、全然だめな演奏をとめた僕がここまで非難されるんだ。と
内心想ったが言わない。

「とにかく、一度、個人練習をするべきだよ！」

とりあえず、個人練習を提案してみる。

まともな演奏をするには一人一人がある程度演奏できなきゃ普通で
きないだろ。

「まあ、確かにそうかもね」

叶が言う。

「同感だ」

舞さんが言う。

こうして、とりあえず個人練習からはじめることになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5838y/>

TAI ~厨二とあほ毛といじめられっこ~

2011年11月21日10時55分発行